大阪遠征

九条之子

俳優Mのファンクラブに入ったのは、四年前のことだ。その頃、とにかく「観やすい芝居」、「観やすい劇場」ということで、人形町のM座の芝居を観ることが多かった。今から考えると、Mの芝居も何回か観ていたのだ。ある芝居のパンフレットに彼を評して、「顔よし、姿よし、芝居よし」と書かれていたのを、しっかりと覚えている。

確かにその通りだなと、納得したことも覚えているが、その時はただそれだけだった。

が、ある時、「大川わたり」という芝居を観て、生まれて初めて「ファンクラブ」というものに入会した。

「大川わたり」を観たのが、九月の初め。翌月の末に、銀座で「華々しき一族」を観た。さて次はと待っていたら、クラブの会報に女性歌手の名古屋公演に出演との記事があった。

「追っかけ」という言葉が浮かんだ。泊りがけで行くのも、悪くない。娘に話したら、

「名古屋、遠征だね」

くじょう　ゆきこ

一九五五年一月二六日生まれ、静岡県沼津市出身。静岡県立沼津東高等学校から、早稲田大学 政治経済学部 政治学科卒業。東京都在住。現在、東京平田日本語学院教務主任。受賞歴：「ぼくのはつ恋」で毎日児童小説小学生部門優秀賞受賞、「青い麦わら帽子」で毎日児童小説中学生部門優秀賞受賞。著書：二〇〇三年七月、新風舎より『黒ねこは知っている』、二〇一二年一二月、日本文学館より『ヴィーナス』を出版。

と言われた。
「遠征？」
「高校の頃の友達がね、ジャニーズのグループの公演を観に、九州や、北海道なんかに行くのを『遠征』って言ったんだよ」
「九州、遠征、か……」
なるほど、と思った。名古屋遠征も悪くない。

名古屋の伏見にある劇場のすぐ近くのホテルに泊まるというのは、かなり贅沢な夜の過ごし方だ。　芝居が終わった後で、炉端焼きの店に入り、芝居の余韻を楽しみながら、一杯やる。この味を知ったら、病みつきになるなと、その時予感した。
翌朝は、チェックアウトの前に、近くの「大須神社」にお参りもした。芝居のパンフレットに、M達主要キャストが、公演成功を祈願して「大須神社」に参拝したとの記事が載っていたからだ。　そして、チェックアウトしてからは、名古屋城に行き、夜の八時を過ぎた新幹線で、東京に帰った。
こんな充実した旅行は、初めてと言ってもいいくらいだ。
地方公演と言っても、都会なのが、またいい。私は都会が好きだ。
私の「遠征」は続いた。最初は名古屋ばかりだった遠征先だが、ある時、突然「大阪」が登場した。
「大阪！」
私の胸は、高鳴った。京都は大好きで、よく行くが、大阪まで足を延ばすことはほとんどなかったのだ。しかも、記念すべき「大川わたり」の再演である。
以来、大阪遠征は、どこへ行くよりも待ちどおしい。

遠征といえば、四十年も前から、私は「遠征」をやっていたのだ。
大学に入って、私はすぐに、W大の「演劇研究会」、通称「劇研」に入部した。直前に「石油ショック」が起き、世の中が急に傾いてしまっていた。　そんな時代に、妖艶に花を咲かせていたのが、いわゆる「アングラ」と呼ばれた芝居だった。
一年生の春に、劇団「状況劇場」の「唐版　風の又三郎」という芝居を観に連れて行かれた。その芝居はなんと、上野の忍ばずの池のほとりに張られた「赤テント」で繰り広げられたのだ。そしてまた、その芝居は、状況劇場の座長であって、作者

であり、演出もやり、尚且つ、主演までやってしまうという、「唐十郎」の芝居の集大成の芝居であったらしい。最初に「最高」のものを見せられてしまったのだ。

私たち一年生は、その後自分達の進むべき道に大いに悩み、とにかく「遠征」を続けたのだった。　状況劇場の芝居だけでも、その後、本拠地ともいえる新宿「花園神社」、東京湾「夢の島」（東京都のごみ捨て場）、はたまた調布の「日活撮影所」（当時）とどこまでも追いかけて行った。

後に芥川賞を獲る唐十郎が芝居で訴えるものは、「いつだって愛」であった。私は大学を卒業すると、芝居をやる側から、観る側に転じた。私の中に燻っている「愛」を表現する方法は、「芝居」から「小説」へと変わっていった。芝居は、一人ではできないからだ。

一月の第二週に「大阪遠征」を実行した。大阪なんばのＳ座で、「樅の木は残った」という芝居を観た。大阪の観客は、反応がいい。劇場全体が、一つになって芝居を盛り上げるような「近親憾」さえある。

私のような「東京組」は、肩身が狭いが、そこは、「遠征」に来たのだから、と思い、自分を奮い立たせる。役者に声を掛けることなども、遠征先の大阪だからこそ出来るのだ、という気もする。

大阪遠征では、「曽根崎」にあるＨホテルを定宿としている。

「曽根崎心中」の曽根崎であり、近くに「お初天神」がある。なんばで芝居を観た後、曽根崎のホテルに帰るとは、それだけで、

（なんて贅沢な時間を過ごしているんだろう）

と、その興奮は翌朝まで冷めることがない。

今年の大阪遠征では、芝居を観た翌日、大阪城へ行き、天守閣に登る前に、大阪遊覧のクルーズに乗った。

運悪く、朝から雨で、傘を差したり、畳んだりは、乗り降りの際には面倒だったが、船から眺める「雨の大阪」は、なんとも言えない風情があった。「大阪しぐれ」とか、「雨の御堂筋」とかいう歌が自然と思い出される。

さて、船が折り返し点を回り、出発地の「大阪城公園」に、近づくと、突然長蛇の列が出来上がっていた。

船を降りてから分かったのだが、その日、大阪城ホールで「SEKAINO OWARI」というグループの昼夜二回の公演があり、その昼の部のための女の子達の行列であった。

それを知った時、再び、「大阪遠征」という言葉が浮かび、「SEKAINO OWARI」というグループの名前が、なぜか、妙にその日の光景にぴったりと合っている気がした。

（世界は、続く！）

と、私は思ったのだ。

その日、大阪は午後から雨が上がったが、東京は大雪で、交通機関が乱れていると、ニュースが報じていた。

私は既に、午後八時過ぎの新幹線のぞみの指定席のチケットを持っていた。東京が大雪だろうが、電車が止まっていようが、じたばたしても始まらない。

（なるようにしか、ならない）

と、腹をくくっていた。

私は、闇を突き抜ける新幹線が大好きである。私を、日常から、特別な時間へ、そして再び、日常へと連れて行ってくれる。

その日、闇を突き抜けてひた走ってきた新幹線が到着した東京駅は、大雪も、それによる混乱もまるでなかったかのように、静かであった。

遠征を終えた兵士のように、私は真夜中に近いが、活気に溢れている東京駅に降り立った。

二泊三日の、短いけれど、長い旅を振り返った。

（また、大阪遠征が出来ますように！）

と、祈りを込めて、真夜中の中央線の電車に乗り込んだ。